



Agenda

1 アクティブラーニング型授業

生徒の思考力・表現力を伸ばし、新大学入試へ対応。
 社会に出てからも力強く活躍する人を育てます。

桐蔭学園では、2015年度より京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授を教育顧問に迎え、本格的にアクティブラーニング(AL)型授業を導入しました。AL型授業とは、従来の講義形式の授業に、生徒が学習した知識を能動的に活用する手法を取り入れた授業を指します。AL型授業の導入によって、新しい大学入試に対応する思考力・表現力を育成するとともに、大学で、さらに社

会に出てからも力強く活躍できる人を育てることを目指しています。

2015年度は、中学・中等1年、高校1年・中等4年をAL型授業の推進学年とし、中心的に導入しました。各教科の教員へのインタビューや、2015年12月に実施した公開研究会の様子など1年間の取り組みををご紹介します。

所属学年は2015年度時点

	英語	数学	国語
各教科の教員に AL型授業を実践してきた 次の3つについてインタビュー	 <p>山崎正幸 教諭 (中学1年)</p>	 <p>橋谷七重 教諭 (高校1年)</p>	 <p>関谷吉史 教諭 (高校1年)</p>
	<p>①英語での教育上のメリットは? 英語を「話す」「書く」活動を増やすことで、バランスのよい英語力を育成することができます。自分の考えを伝えるためにはそれまでに学習した知識を総動員する必要があり、生徒が自発的な復習を行うようになります。</p>	<p>①数学での教育上のメリットは? 授業時間内に演習をすることで、生徒の疑問をその場で解決できるようになりました。生徒同士で教え合うことで、自力で問題を解く力だけでなく、説明する力や考える力も伸ばすことができると実感しています。</p>	<p>①国語での教育上のメリットは? 一番は生徒の「気づく力」が伸びることです。文章理解の鍵となる問いを教員が与えるのではなく生徒とともに考えることで、論理的思考力、想像力、表現力などが鍛えられます。</p>
	<p>②授業で実施したことは? 指定されたテーマについて書いた英文を、クラスを越えてランダムに交換しコメントを付け合う「交換エッセイ」という活動を行いました。</p>	<p>②授業で実施したことは? 教員の説明は極力短く要点のみに絞り、演習の時間を確保しました。グループになり生徒は互いに教え合いながら応用問題や大学入試問題を解きました。</p>	<p>②授業で実施したことは? ペアワーク、グループワークを導入しました。芥川龍之介『羅生門』ではグループで「問題を作る」「解説を書く」ことを通して文章への理解を深め、それを表現する活動を行いました。</p>
	<p>③生徒はどう変わった? エッセイを書く際、自発的に辞書を引いたり教員へ質問したりと積極的な学習姿勢がみられるようになりました。どうしたらよりよいエッセイになるか、自然と話し合う姿に生徒たちの大きな成長を感じました。</p>	<p>③生徒はどう変わった? 「友人に説明する」ことがよい刺激となり、授業中に内容を理解できるよう活発に頭を働かせています。授業後に、自主的に相談や教え合いをする姿もみられるようになりました。</p>	<p>③生徒はどう変わった? 授業をつくるのは自分たちだと考えるようになってきたと感じています。自分たちが気づくことには意味があると自信を持ち、発言できるようになってきました。</p>



photo by Ai Hirano

京都大学
高等教育研究開発推進センター教授・
桐蔭学園教育顧問
溝上慎一 教授

京都大学高等教育研究開発推進センター教授、京都大学博士(教育学)。専門は青年心理学と高等教育。日本のアクティブラーニング研究の第一人者であり、国内の大学、高等学校でのアクティブラーニング型授業の導入実績を多数有する。近著に、溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂(2014年)、溝上慎一(総監修)『アクティブラーニングの技法・授業デザイン』東信堂ほか全7巻(2016年)

先生方の奮闘に支えられ、桐蔭学園は全国から教育関係者が視察に訪れる実践モデル校となっています。

この1年をふり返って

世界的に取り組まれている“active learning”を、カタカナの「アクティブラーニング」と命名し、日本に紹介してはや5年が経ちました。その間、大学教育で2012年に国の施策となり、2014年には小学校から高校にもこの言葉を柱として、学校教育全体の施策としていくことが決まりました。私は全国の教育関係者に、アクティブラーニングを導入するというのはこういうことだ、という実践モデルを、とくに中学高校、教育委員会の人たちに見せなければならなくなりました。

桐蔭学園で実践モデルを作ることになりました。桐蔭学園にアクティブラーニングを全教科導入し始めたちょうど1年前(2015年4月)、私は月に5回も6回も、多いときには週2回ほど、京都から横浜まで指導に来ました。とても大変でしたが、桐蔭学園の先生方は一生懸命取り組んでくれました。お互いにとって並みならぬ苦闘でし

たが、桐蔭学園の先生方は頑張ってください、私の期待をはるかに上回るレベルで、アクティブラーニング型授業をつくっていきました。導入後たった2ヶ月でここまでできた、というものを記録として残し、YouTubeで配信することにしました(「桐蔭学園」「アクティブラーニング」とキーワードを入れてください)。是非ご覧ください。いま、全国の中学高校、教育委員会の関係者が、頻繁に桐蔭学園に視察に来てアクティブラーニング型授業を学んでいます。先生方の奮闘に敬意を表したい気持ちでいっぱいです。

次の1年の展望

桐蔭学園でアクティブラーニング型授業改革はしっかりと根を張り、全国に見せていけるレベルで展開していると、ひいき目なしで思います。あとは、一人でも多くの先生がさらに力量を上げていくこと、生徒がアクティブラーニングをおこない、かつ従来学力もしっかり身につけることを目指していきます。

新大学入試への対応

2020年度から始まる新大学入試制度においては、従来の選択式によるセンター試験に代わり、記述式による思考力・判断力・表現力を問う問題が出題されることが見込まれています。2016年度東京大学2次試験の英語では「下の画像について、あなたが思うことを述べよ」という問題文とともに、絨毯の上に寝転ぶネコのような動物と、それを指でつまもうとするかのような人の手が写った画像が示され、大きな話題となりました。このように、答えが一つに限定されず、生徒が想像力をはたら

かせ、かつ論理的に回答することを求める出題が増えていくことでしょう。

本校で実践しているAL型授業では、生徒が能動的に知識を活用して考え、それを表現する訓練を日常的に行っており、これはまさに新大学入試に対応する学力を育成するものと考えています。さらに、科目横断型の問題にも対応できる知識の活用・思考力を育てるため、2015年度には複数科目の教員のチームティーチングによる授業も取り入れています。

アクティブラーニング 公開研究会



2015年12月12日に「桐蔭学園アクティブラーニング公開研究会2015」を開催し、約1年間のAL型授業の実践報告を行いました。本校教員による13の公開授業と外部の有識者を招いたシンポジウムを行い、全国から400余名の方にご来場いただきました。ご来場の皆様からいただいたご意見を真摯に受けとめ、今後もAL型授業のモデル校として、取り組みを進めていく所存です。

AL型授業実践に向けた 教員研修



AL型授業の実践のため学内にアクティブラーニング推進委員会を立ち上げました。推進学年を中心として委員となった約30名の教員は、毎月のように学内外の研修に参加し、研鑽を積んできました。教科ごとにALの技法をどのように導入したらよいか検討し、学内の研究授業の後には教員同士で長い時間議論が交わされることもしばしばありました。2016年度もAL型授業実践の全国のモデル校となることを目指し、引き続き取り組んでいきます。

理科



池田信之
教諭
(中等4年)

①理科での教育上のメリットは?

「見る」「聴く」というインプットに加え、知識・概念をアウトプットすることで理解が深まり効果的な学習となります。さらに、実験などの「体験」を増やすことで、授業のライブ感や生徒が参加しているという感覚を高めることが可能です。

②授業で実施したことは?

ペアワークで習った知識・概念を相手に伝えるトレーニングを実施しました。化学変化などについてQ&A形式の「化学カルタ」で復習を行いました。

③生徒はどう変わった?

分かったつもりでもうまく説明できない時、理解が浅いことに気づく姿がみられました。「化学カルタ」ではなぜその札が答えなのか、生徒間で自然に教え合う場面が生まれました。

社会



青木寛子
教諭
(中学1年)

①社会での教育上のメリットは?

授業の幅が広がり、グループ学習による意見交換、グループ発表のための協働作業など様々な形態の授業に参加することで、学習に対して主体的に取り組む姿勢が培われ、知的好奇心が深まります。

②授業で実施したことは?

環境問題や領土問題に関するディスカッションのほか、校外学習の行先である明神山の地形図を読み解き、現地でグループ探索を行いました。

③生徒はどう変わった?

グループ発表の活動を通じてクラス全員の前ではきはきと発表できるようになり、スライドのまとめ方や聴く姿勢も身に付いたと感じています。